

廬山白蓮社而已云々。

昔天和元年辛酉年亥冬吉祥日

賀州加賀郡山上寺町金池山心蓮社八代

辨蓮社成譽念喚秀也叟謹九拜

右鐘銘、今要文を摘んで爰に記載す。世人の俗傳に、心蓮社は長谷部信連の菩提の爲に造立す。故に元と信蓮社なりといふは非也。長家記に、長九郎左衛門連龍之弟菊松、七尾城没落日、傳母扶抱而遁難奔越中。于時五歲。後年爲僧加州心蓮社開基焉。號長譽上人と。三州志疑考に云ふ。天正五年九月十五日、長對馬續連等七尾城中にて游佐續光の爲に自刃す。續連の長男綱連は、伏兵小南内匠の爲に月刀を以て鞍上より薙ぎ墜され、遂に戦死す。綱連の子竹松彌九郎、杉山三郎、城中の女房と石動山へ退くを、温井の爲め殺さる。彌九郎の弟に菊丸と云ふありて五歳なりしを、乳母抱持して越中へ遁れ隠し、後に金澤卯辰山心蓮社の開基となる。とあり。龜尾記には、當寺心蓮社の開山長譽上人は、能登七尾長對馬守續連の末子菊松といふ。天正五年

九月十五日父續連及び兄綱連をはじめ、七人共謙信の爲に殺害せらる。此の時菊松いまだ幼少にして、乳母に抱かれ、からうじて死を遁れ、後法體して京都智恩院へ至り弟子となる。其の後禁裏へ參内龍顏を拜し、紫衣を許され、眼明きの彌陀の畫像を賜ひ、加州金澤鹽屋町に一字を建て、心蓮社と號す。寛永年間今の地へ移轉し、堂後の位牌所に長譽上人の像を安置す。支關の虹梁に、飛驒の名工が作なりとて、鶴の彫物ありしかど、文化の大衆免焼に火災に罹り灰燼となる。世俗に、心蓮社はむかしは信蓮社と書きたりしを、後に心蓮の文字に改む。故に長家と相替からずといふ。後世無識の人の妄誕にて、元より取るに足らず。鐘の銘文も誤ありといへり。按ずるに、長譽休譽何れが正しからん。

○眼明阿彌陀來歷

此の彌陀尊は、心蓮社の本尊にて、世に名高き尊像なりと龜尾記に云へり。むかし多田滿仲の兒美女丸、手習學問の爲め叡山の惠心僧都を頼み登山させられしに、此の子天性聰明なれども、武事のみ心術を盡し、些々たる文藝をば

好まざりけり。父の滿仲これを聞き、山より呼び下し、怒りて殺害せんとするを、家士の藤原仲光立塞りて美女丸を避けしめ、我が子の幸壽を身代りとなし、幸壽を殺害して首を取り、美女丸の首なりとて滿仲に捧げけり。然るに美女丸の母誠なりとおもひ、悲歎の餘り遂に盲目となる。後幸壽の身代りせし事を聞いてうれしく、又悲しさも堪へかねければ、此の彌陀佛に祈念すること他事なかりしに、不思議なる哉盲眼忽然として明かになり、舊の如く見ゆけり。爰に於て、彌陀尊像の靈驗いちじるきこと身にあまりて覺えける故に、終身靈像の尊前を去らず、餘念なく佛名をととなへ、年を経て遂に目出度往生を遂げられしとなり。此の事近國にかくれなく、擧つて參拜する人多しとぞ。然るに此の靈像後に禁裏へ納りありしを、心蓮社の開山長譽上人參内の時、此の靈佛なる畫像を賜はり、後金澤へ歸り、心蓮社を創立して本尊となしたり。されば眼病はいふに及ばず、諸の難を救ひ給ふこと、猶靈驗いちじるとぞ。今堂前に安置せる佛像は、御形の寫なりといへり。右靈像の縁起あり、左に載之。

加州金澤心蓮社眼明如來縁起

夫住持三寶者泥木素像等也。西方要決云。今與淺識人作大因緣。及至此靈像持可尊承。暫時觀形罪消增福。若生少慢長惡善亡等。已上。

抑當山安置尊容。天竺鷄頭摩寺五通菩薩之畫圖所之尊容也。抄云。五通菩薩往安樂世界。請阿彌陀佛。娑婆衆生願生淨土。無佛形像。請垂降許。佛言。汝且前去。尋當現彼。及菩薩還聖儀已至。一佛五十菩薩各座蓮華在樹葉下。五通菩薩取葉所在圖寫。是則天竺畫像始也。漢明帝及請佛法。摩騰等奉持此尊容至洛陽云々。已上略抄。

爰我朝惠心僧都。館居橫川峰專修西方淨業。親拜見來仰尊容是圖寫。今世流布所二十五菩薩像。殆可謂五通菩薩後身歟。或日不計五通菩薩圖畫傳得尊容。信仰如生身。其頃多田滿仲息第九子勸美女丸欲令出家。美女心中雖不諾。父命難遁。登叡山。雖爾不學一文。終日兵法業明暮。送三箇春秋。滿仲呼下美女試其修學。不覺一文一句如響。滿仲忿怒餘拔劍討美女。美女平日兵法臨此時得利。持經卷爰逃死。隱臣下藤原仲光宅。滿仲以使云。速美女切頭可持參。